

中国人日本語学習者はどのように間接発話行為を理解するのか

How do native Chinese speakers learning Japanese comprehend indirect speech act?

李 璐
LI LU

摘要： The present study examined the process of comprehension of indirect speech act by native Chinese speakers learning Japanese. I firstly improved the limitation of previous research and conducted a cloze test to measure 30 tester's proficiency levels of Japanese. With lower and higher groups divided by the test result, these testers were further examined by introspective interview method: what kind of context information they would use, and if there were any difficulties in the comprehension of indirect refusal, as well as conventional indirect opinions and nonconventional indirect opinions. The results showed that, in addition to linguistic input, learners were likely to use non-verbal context information, including "Speaker Intention", "Paralinguistic Cues" and "Adjacency Pair Rule", to comprehend indirect speech act. The biggest difficulty for learners was their limited listening ability. I found that learners with different proficiency levels differed in the use of context information and the types of difficulties of comprehending three types of indirect speech acts. On the basis of results above, this work provided some useful suggestions for promoting Japanese learners' comprehension of indirect speech act.

キーワード： 中国人日本語学習者 native Chinese speakers learning Japanese; 間接発話行為 indirect speech act; 慣習性 conventionality; 習熟度 proficiency; 理解過程 process of comprehension

1. はじめに

間接発話行為は、文字通りの意味とは異なる発語内効力を伝達する発話行為である。特定の言語形式、意味構造、あるいは談話パターンで遂行される慣習的な間接発話行為と、これらの特徴を持たず、文脈推論してから話者の意図が解釈される非慣習的な間接発話行為に分けることができる。間接発話行為の慣習性における違いにより、話者の意図解釈に必要となる処理負荷も異なると考えられる。Gibbs (1981, 1986) および仲・無藤 (1983) は、母語話者の間接発話行為の理解に要する反応時間を測定し、慣習的な間接発話行為が非慣習的な間接発話行為よりも迅速に理解されると指摘した。外国語学習者について、Cook & Liddicoat (2002)、Taguchi (2005)、張 (2017) などは、慣習的な間接発話行為が非慣習的な間接発話行為よりも、正確かつ迅速に理解されることを明らかにした。これらの研究は、慣習性、習熟度が学習者の間接発話行為の理解に与える影響について、四者択一あるいは正誤判断の課題形式により、正確さと迅速さを指標にして、学習者の理解を調査した。しかし、学習者の理解過程そのものに注目し

た研究ではない。そこで、本研究では、日本語習熟度の異なる学習者が、慣習・非慣習的な間接発話行為を理解する際に、どのような文脈情報を理解のストラテジーとして使用しているか、また、どういう困難点があるのか、を明らかにするために、日本語習熟度を測定するテストおよび間接発話理解テストの結果を基に、インタビューを行い、間接発話行為の理解プロセスを解明する。

2. 慣習的な間接発話行為と非慣習的な間接発話行為

Morgan (1978) は、間接発話行為の慣習を、個人レベルでの習慣が社会全体に広がり、社会レベルの共通知識になると捉えた。さらに、慣習を「言語の慣習」と「使用の慣習」に区別した。「言語の慣習」は、言語または少なくとも言語の一部を構成するものであり、「使用の慣習」はある目的のために用いられることが慣習的な場合を示す。これに基づいて、Taguchi (2005, 2008) および張 (2017) は、慣習的な間接発話行為を、特定の言語形式、意味構造、あるいは談話パターンから話者の意図が特定できると定義した。英語の研究では、Cook & Liddicoat (2002) および Taguchi (2005) では、Can you...?や Could you...?のような能力を聞くタイプ、あるいは Will you...?や Would you...?のような意欲を聞くタイプが、慣習的な間接発話行為の調査項目として使われる。これらの表現は、能力や意欲を訊ねるというより、「依頼」や「申し出」の表現として定着している。日本語では、「～てもらえる」「～てくれる」のような表現(仲・無藤 1983) 以外に、ネガティブな意見を表す「あまり」「ちょっと」「どうも」などの副詞、「かな」「かも知れない」「という気が」などの認識文末マーカーおよび修辞疑問や中途終了文、また、理由や言い訳で断りを表す談話パターンも慣習的な間接発話行為とされている(Taguchi 2008)。一方、非慣習的な間接発話行為は、複数の意味に解釈される表現であり、特定の文脈がなくては話者の意図が特定できない発話行為である。「コーヒーを飲むかい？」に対して、「コーヒーを飲むと目がさえるわ。」(Sperber & Wilson 1995; 内田他訳 1999) という答えがあったとする。たいていの場合は、起きていたくないのでコーヒーを飲みたくないという意味である。しかし、深夜まで残業するのでコーヒーを飲みたいという意味にも取れよう。日本語母語話者は、こうした微妙なコンテクストをイントネーションの違いで表現する。

3. 先行研究の概要と本研究の課題

3.1 学習者の間接発話行為の理解過程を検討する先行研究の概要と問題点

英語の研究について、Taguchi (2002) は英語習熟度の高い日本人学習者 4 名、習熟度の低い日本人学習者 4 名(学術レベルと TOEFL 成績で決める)を対象に、意見、断りおよび打ち明けの合計 15 項目の間接発話の理解課題を音声提示し、学習者の理解過程の報告を内省インタビュー法(introspective interview method)で収集した。そして、「パラ言語」「隣接ペアの規則」「背景知識/経験」「キーワード推論」「論理的推論」「話者の意図」合計 6 種類の理解ストラテジー

を認定した。その結果、8名の学習者全員が共に「パラ言語」「隣接ペアの規則」を多用していた。また、習熟度の高い学習者は、「話者の意図」をより多く使用したが、習熟度の低い学習者は「背景知識/経験」「キーワード推論」を多用した。Lee (2010) は、ホンコン在住の7歳、9歳、12歳の合計60名の年少の英語学習者を対象に、依頼、謝り、断り、褒め、不満からなる12項目の直接、間接発話の理解ストラテジーを思考発話法 (think-aloud method) ⁽¹⁾ で報告してもらった。その結果、「発話の意味と連鎖」「発話者」「先行発話と対応との関係」「文脈情報」「異文化比較」「個人の社会知識」という6つのカテゴリが認定された。また、「発話の意味と連鎖」および「発話者」による理解が最も多く報告された。

日本語の研究について、Taguchi (2008) は、学習期間で日本語学習者の習熟度を決め、中級(4学期)、初級(2学期)それぞれ5名を対象に、慣習的である間接断りおよび間接意見、非慣習的な間接意見の合計12項目の理解課題を音声提示し、学習者の理解過程に関する内省口頭報告 (introspective verbal reports) について質的な考察を行った。その結果、「パラ言語」「隣接ペアの規則」「言語知識の慣習性」など多様な理解ストラテジーが使われたことが明らかになった。また、習熟度の高い学習者は習熟度の低い学習者よりも、「言語知識の慣習性」のストラテジーの使用が多くみられた。Zhang (2018) は、24名の日本語能力試験の1級(N1)に合格している中国人の上級日本語学習者を対象に、慣習的な間接不同意、非慣習的な間接不同意の合計22項目の理解課題を音声提示し、刺激再生法 (stimulus recall method) ⁽²⁾ で学習者の理解過程を報告させた。分析の結果、慣習的な間接不同意は「キーワード」が最も多く使われ、非慣習的な間接不同意は、「キーワード」「背景知識」「パラ言語」など多様な文脈情報が用いられたことが分かった。また、日中両言語の使用で慣習性が類似している理解課題には、学習者が母語の背景知識を生かして不同意を理解する傾向がみられた。一方、両言語で慣習性が異なる理解課題においては、学習者が主に日本語の知識を運用し、不同意を理解する傾向がみられた。

これらの先行研究は、以下の4点について検討の余地がある。第1に、母語の違いである。母語が異なるグループ間では、間接発話行為が生み出される含意の理解に差異があることが知られている (Bouton 1988; Holtgraves 2007)。しかし、Taguchi (2008) では、日本語学習者の母語が不統一であった。そのため、母語を統一して検討する必要がある。第2に、習熟度の違いである。Zhang (2018) の調査協力者は上級日本語学習者のみであり、習熟度別の比較はしなかった。また、Taguchi (2008) は、学習期間を習熟度と考えて検討したものの、日本語能力を実測したわけではない。学習期間が同じでも、日本語能力が同じでないことは容易に予想できるであろう。第3に、一般化の問題である。Taguchi (2002, 2008) は各グループで4名ないし5名のデータしか検討しなかった。そのため、理解ストラテジーと困難点が個人の特徴であるのか、日本語学習者全体の代表的な特徴であるか判別できない。第4に、数量化の問題である。Taguchi (2008) は、限られた人数の日本語学習者を対象に研究して、質的な報告とした。そのため、慣習性と習熟度の影響を計量的・統計的に検討することができていない。

3.2 本研究の目的と課題

中国人日本語学習者の日本語習熟度別に慣習・非慣習的な間接発話行為の理解過程を考察する。具体的には、(1) 下位・上位群の学習者がどのくらい正確に慣習・非慣習的な間接発話行為を理解することができるか、(2) 下位・上位群の学習者が、慣習・非慣習的な間接発話行為を理解するのにどのような理解のストラテジーを使用するか、(3) 下位・上位群の学習者が、慣習・非慣習的な間接発話行為を理解するのに、どのような困難点があるか、である。

4. 調査の概要

4.1 調査協力者

中国の大学で日本語を主専攻とする2年、3年、4年生の計30名である。平均年齢は20歳9カ月、標準偏差は1歳1カ月であった。全員が日本に3カ月以上滞在したことはない。

4.2 間接発話理解テストの概要

李・玉岡(2019)の調査項目から、慣習的である間接断りおよび間接意見、非慣習的な間接意見をそれぞれ4項目、合計12項目の四者択一の理解課題を選出した。各項目は、場面説明、2者の対話、そして4つの選択肢の質問からなる。2者の対話は、最後の文が間接発話文として設定されている。12項目の理解課題に使われた間接発話文を表1に示した。

表1 12項目の間接発話理解課題に使われる間接発話文

項目	慣習性	間接発話文
1	間接断り (使用の慣習)	明日の朝、仕事あるから、早く起きないと。
2		あ、俺の車は、家族しか保険をかけてないんだ。
3		最近、よく外食してお金使いすぎちゃったんだ。
4		あ、そうなんだ、今から7時まで、コンピュータの授業があるんだ。
5	間接意見 (言語の慣習)	そうね。私は、仙台は、あまり。
6		北海道かあ、今の季節、北海道はちょっと。
7		そうかな。
8		うーん、君の気持ちはよく分かるけど。
9	非慣習的な 間接意見	また買ってきてくれれば。
10		僕だったら、85点取れば、うれしいよ。
11		毎日疲れて死にそうだよ。
12		その授業の担当の先生、私のことあまり好きじゃないって知ってるでしょう。

表1に示した項目1から項目4は理由・言い訳で表す間接断り行為である。理由や言い訳を述べて断りを表す形式は日常的によく使われる社会・文化的に共通した談話パターンである(Taguchi 2008)。この4項目はMorgan(1978)が指摘した「使用の慣習」に相当する。項目5から項目8は特定の言語形式、意味構造で遂行される慣習的な間接意見である。「あまり」と「ちょっと」などの量化副詞は、ネガティブな意思表示を表すときによく使われる(Taguchi 2008)。項目5では、「あまり」を文末で否定表現なしで使用し、項目6では「ちょっと」を間接発話文

に組み込んだ。また、日本語のネガティブな間接意見のもう一つの特徴は、躊躇を表す認識文末マーカ（epistemic sentence-ending markers of hesitancy）の使用である。「かな」は1つの例として挙げられている（Taguchi 2008）。しかし、「かな」は下降イントネーションで述べた時に限り、ネガティブ性が出ると考えられる。項目7は「かな」を含んだ「そうかな。」を設定した。さらに、「けど」は、話者が自分の意図を言語化せず、聞き手にそれを察してもらおうとする表現（朴 2008）である。項目8は「けど」を含んだ「君の気持ちはよく分かるけど。」を使用した。この項目も Taguchi (2008) が指摘した否定的意見を表す「部分的に賛成するストラテジー」および「中途終了文」の特徴に当てはまる。これら特定の言語形式、意味構造を持つ項目は、Morgan (1978) が提示した「言語の慣習」に相当する。項目9から項目12までの4項目は非慣習的な間接意見の理解課題である。「ポジティブな間接意見」と「ネガティブな間接意見」それぞれ2項目である。これらは、良し悪しが明示されておらず、特定の言語形式や意味構造もない。一見すると、先行発話とは関係が無いように思われる発話であり、間接的に意見を示し、その解釈を聞き手の推論に委ねている。これらの慣習・非慣習的な間接発話文12項目は、2者の対話の最後の文に組み込んだ。言語学の知識を持つ3名の日本人母語話者に対話の自然さを修正してもらった。

12項目の2者の対話の文字数と難易度を統制した。まず、3種類の間接発話理解課題の2者の対話の文字数を一元配置の分散分析で検討した結果、主効果はみられなかった [$F(2, 9)=14, p=.87, ns$]。これで、2者の対話の長さ（文字数）の影響が統制された。また、間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見の理解課題における2者の対話における語彙の難易度を、リーディングチュウ太 (<http://language.tiu.ac.jp/>) で検索した。その結果、日本語能力試験の2級（N2）レベル以下の語彙は、それぞれ90.9%、83.9%、93.2%であった。つまり、本研究で使用した語彙は、ほぼN2レベル以下の語彙に限定したことになる。これらの2者の対話を、標準アクセント話者男女計2名に発音してもらい、録音した。

12項目の内容理解は、4つの選択肢から正解を1つ選ぶ形式の問題である。正しくない選択肢は、正解の内容と「反対」の意味を示す選択肢が1つ、2者の対話の「最後」の間接発話文のキーワードを含む選択肢が1つ、対話「全体」の内容と関連する選択肢が1つというパターンである。選択肢の内容も、上述した3名の日本人母語話者に修正してもらい、正解が1つしかないことを確認した。さらに、同じパターンで作成したフィラー8項目も加えて、合計20項目とした。これらのフィラーは、李・玉岡（2019）で使用したものと同一である。以下に理解課題の1例を挙げる。

項目4：

【場面】 院生室で日本人の学生とイギリスからの留学生が話しています。

女の人：山田さん、今、時間ありますか？

男の人：あ、マリアさん、どうしたんですか？

女の人：これ、日本語で書いた期末レポートなんです。ちょっと急ですが、日本語をチェックしてもらえますか？

男の人：あ、そうなんだ。今から7時まで、コンピュータの授業があるんだ。

【四者択一の選択肢】

- A 男の人は、マリアさんの日本語のチェックはすぐにはできません。(正解)
- B 男の人は、今からマリアさんの日本語のチェックをします。(反対)
- C 男の人は、7時から、コンピュータの授業があります。(最後)
- D 男の人は、日本語で期末レポートを書きました。(全体)

4.3 習熟度を測定するためのクローズ・テストの概要

学習者の日本語習熟度を測定するために、小森・玉岡・近藤(2007)が使用したクローズ・テスト(cloze test)を用いた。このテストは、増田光吉(1969)『アメリカの家族・日本の家族』からの抜粋した585文字からなるテキストに、86カ所の空所を設けて作られている。そして、これらの空所に適切な文字を入れて完成する形式のテストである。小森ほか(2007)のクローズ・テストのクロンバックの信頼度係数は、 $\alpha=.95$ と非常に高かった。

4.4 テストと調査の実施手順

テストおよびインタビュー調査は、以下の手順で実施した。まず、(1)クローズ・テストの質問紙を配布し、「漢字、ひらがな、カタカナのいずれか1文字を()内に書き入れて、文の意味が通るように、文を完成してください。」と教示し、20分後に回収した。次に、(2)学習者に間接発話理解テストの質問紙を配布し、ヘッドフォンを着用してもらい、「以下の録音を聞いてください。録音は1回しか流れません。録音を聞いて、最もふさわしい選択肢を選んでください。」と教示し、20項目の理解課題を1つずつ音声提示して、間接発話理解テストを実施した。その後、(3)「これから録音を再度流します。それを聞いて、自分が選んだ選択肢とそれを選んだ理由を中国語で報告してください。」と教示し、12項目の間接発話理解課題を1つずつ提示して、学習者の口頭報告を録音した。所要時間は、1人当たり約80分であった。

4.5 分析方法

テストの採点は、正答が1点、誤答が0点、間接発話理解テストは計12点満点(フィラー項目は採点外)であり、クローズ・テストは、空所ごとに1点とし、86点満点で計算した。

学習者の正答項目に対する口頭報告を理解ストラテジーの分析対象とした。本研究では、Taguchi(2002)における「論理的推論」「キーワード推論」「隣接ペアの規則」「話者の意図」「パ

ラ言語」を再定義し、また、「言語知識の慣習性」を加え、計6種類の理解ストラテジーで学習者の口頭報告を分析した。認定基準および学習者の報告例⁹⁾を表2に示した。

表2 間接発話行為を理解するためのストラテジーのタイプおよび学習者の報告例

理解ストラテジーのタイプ	学習者の報告例
論理的推論: 間接発話文あるいは対話の流れを語り直して、意味論的な意味(文字通りの意味)をもとに、話者の意図を解釈するという演繹法の推論プロセスである。	JL25-12 ⁹⁾ : 最後は「その授業の担任の先生、私のことあまり好きじゃないって知ってるでしょう」と言っただけで、いい成績が取れないに違いない。JL10-4: 「7時までコンピュータの授業がある」と言っただけで、今すぐ女性の「日本語のチェック」をすることができないと判断した。
言語知識の慣習性: 特定の言語形式、意味構造の慣習的な用法で話者の意図を解釈する。	JL13-5: 「あまり～」は否定形と共起するのが一般的で、「あまり好きではない」と推測した。JL8-6: 「ちょっと」が反対の意図を表している。JL27-5: 「～ちゃった」はネガティブな意味を表している。
キーワード推論: 対話中の部分的な表現をもとに推論し、話者の意図を解釈する。	JL22-2: 「家族しか」「しか保険」を聞いたので、女の人に貸したくないと思う。JL4-7: 「履修していない」と聞いたので、「履修したくない」と推測した。
隣接ペアの規則⁹⁾: 会話分析における隣接ペアの規則を運用し、話者の意図を解釈する。	JL22-1: 男性は「早く起きないと…」と言った、もし飲みたかったら、「ありがとう。」とか言うはずなのに、仕事という無関係な話をした。
話者の意図: 話者が何のために間接発話を使うのかを説明する。つまり、間接発話の機能を報告する場合である。	JL11-3: 男性の誘いに対して、女性は1つの理由で答えた。はっきりと断らないが、「行けない」という気持ちを表している。
パラ言語: 発話に伴うイントネーション、ポーズ、リズムなどで話者の意図を解釈する。	JL3-7: 意味内容がよく分からないが、女性のイントネーションで、言われたとおりにやりたくない判断した。

注: これは Taguchi (2002: 159) の表2を参考にして作成したものである。

表3 間接発話行為の理解における困難点のタイプおよび学習者の報告例

理解における困難点のタイプ	学習者の報告例
聴解力の欠陥: (a) 「聞き取れない」と報告したり、「聞き間違い」「聞き漏らし」と判定されたりする場合; (b) 対話中の語彙、表現を含む選択肢を直接に選んでしまう場合; (c) 聞き取れた個々の語彙、表現をもとに、恣意的な推論を行い、選択肢を選んでしまう場合; (d) 発話内容が分からず、パラ言語だけで推論し、話者の意図を誤解してしまう場合。	(a) JL4-2: あまり聞き取れなかった。JL1-4: 最後の文は「7時から」って言ったじゃない? JL6-8: 「けど」は気づかなかった。(b) JL2-9: 「ルームメイト」というキーワードを聞いたので、Cを選んだ。(c) JL11-1: 「あ、マレーシアのコーヒー」だけが聞こえたので、飲みたいと思って、Cを選んだ。(d) JL6-1: 男性の口調が婉曲的に聞こえたので、「飲みたい」と判断した。
言語知識の間違い: 特に課題7の「5つ」を「6つ」と誤まっている場合を指す。	JL27-7: 「いつつ」は「5つ」なんだ、そのとき「6つ」と誤まった。
言語知識の慣習性の不理解: 「あまり」「ちょっと」などの項目の慣習的な用法が分からないと報告したり、判定されたりする場合。	JL2-5: 最後の「私は、仙台はあまり」の意味が分からない、選択肢Bのなかで、「あまり」があるので、それを選んだ。JL6-6: 「ちょっと」は賛成でも反対でもなく、考えていることを表す。
談話状況からの逸脱: 間接発話文が正しく報告できたが、前文脈等の情報をうまく利用できず、話者の意図を正しく推論できない場合。	JL26-10: 「僕だったら、85点取れればうれしい」と言っただけで、選択肢Bの内容と同じだ。
背景知識/経験の干渉: 反対の意見を直接言わないのは、反対ではなく迷っていると判断した場合。	JL19-8: 理由をつけるのは躊躇を表す。JL22-7: 相手の薦めに、「もう5つ履修している」と答えるのは躊躇だと思う。
油断: 選択肢を見間違えたと報告した場合。	JL20-1: 「飲みたい」を「飲みたくない」と見間違えた。

誤答項目に関する口頭報告を理解の困難点に関する考察の対象とした。分析の結果、「聴解力

の欠陥」「言語知識の間違い」「言語知識の慣習性の不理解」「談話状況からの逸脱」「背景知識/経験の干渉」「油断」という6種類の困難点が認定された。困難点の認定基準および学習者の報告例を表3に示した。なお、「聴解力の欠陥」は、(a)「聞き取れない；聞き間違い；聞き漏らし」というケース以外に、(b)「聞き取れた表現による選択」、(c)「部分的表現による推論」、(d)「パラ言語による誤解」も含んでいる。

5. 分析と結果

5.1 下位・上位群の学習者の間接発話行為理解における正答率

30名の学習者のクローズ・テストの結果は、最高点が73点、最低点が22点であり、平均は52.40点、標準偏差は11.44点であった。クロンバックの信頼度係数は $\alpha=.91$ と高かった。このクローズ・テストの結果にしたがい、下位群は22点から53点までの15名($M=43.67, SD=8.29$)、上位群は54点から73点までの15名($M=61.13, SD=6.23$)とした。

間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見の平均正答率について、下位群はそれぞれ56.67%、66.67%、35.00%で、上位群はそれぞれ83.33%、78.33%、68.33%であった。日本語の習熟度(下位・上位群という2つのグループ)×慣習性(3種類の間接発話理解課題)⁽⁶⁾の二元配置の分散分析を行った。その結果、習熟度 [$F(1, 84)=17.28, p<.001, \eta_p^2=.17$] および慣習性 [$F(2, 84)=5.22, p<.01, \eta_p^2=.11$] の主効果が有意であった。しかし、両変数の交互作用は有意ではなかった [$F(2, 84)=1.24, p=.29, \eta_p^2=.03$]。間接発話理解課題は3種類あるので、シェフェの多重比較を行って比較した。間接断りと慣習的な間接意見の正答率には有意な違いはみられなかった ($p=0.94$) が、慣習的な間接意見は非慣習的な間接意見より有意に理解の正答率が高く ($p<0.05$)、また間接断りと非慣習的な間接意見の正答率と比べて有意に高かった ($p<0.05$)。さらに、3種類の間接発話理解それぞれにおける日本語習熟度の影響を検討するために、下位・上位群の正答率を t 検定で比較した。その結果、間接断り [$t(28)=-2.44, p<.05$]、非慣習的な間接意見 [$t(28)=-3.50, p<.01$] は上位群のほうが下位群よりも正答率が有意に高かった。しかし、慣習的な間接意見 [$t(28)=-1.25, ns$] は、両群の正答率には有意な違いがみられなかった。以上のように、習熟度と慣習性が共に学習者の間接発話理解の正確さに影響した。以下は、学習者の理解のストラテジーおよび困難点の側面から考察する。

5.2 下位・上位群の慣習・非慣習的な間接発話行為に関する理解ストラテジーの使用

本研究では、12項目×30名、つまり、計360回の口頭報告を収集した。そのなかで、正答233項目の口頭報告を、表2に示した基準で認定した。1つの理解ストラテジーを1回と計算し、1項目において複数の理解ストラテジーが報告される場合は、タイプごとに1回のみ集計した。認定と集計の結果は表4に示した。下位・上位群の正答率が異なるので、Taguchi (2002) のように、理解ストラテジーの使用回数を直接比較するのではなく、特定のストラテジーの1

正答項目当たりの使用割合 (%) を計算した (たとえば、下位群 15 名 × 4 項目 = 60 項目の間接断り理解課題における正答項目数が M 項目、「論理的推論」の使用数が N 回の場合、「論理的推論」の使用割合は N/M で計算した。つまり、理解ストラテジーの使用数/正答項目数*100、である)。

表 4 下位・上位群の間接発話行為の理解ストラテジーの認定結果

発話種類	グループ分け	論理的推論	言語知識の慣習性	キーワード推論	隣接ペアの規則	話者の意図	パラ言語	合計	正答項目数
間接断り	下位群	21 61.76%		1 2.94%	5 14.71%	11 32.35%	2 5.88%	40	34
	上位群	40 80.00%		2 4.00%	5 10.00%	5 10.00%	4 8.00%	56	50
	全体	61 72.62%		3 3.57%	10 11.90%	16 19.05%	6 7.14%	96	84
慣習的な 間接意見	下位群	8 20.00%	26 65.00%	7 17.50%	4 10.00%	1 2.50%	14 35.00%	60	40
	上位群	13 27.66%	34 72.34%	2 4.26%	4 8.51%	3 6.38%	22 46.81%	78	47
	全体	21 24.14%	60 68.97%	9 10.34%	8 9.20%	4 4.60%	36 41.38%	138	87
非慣習的な 間接意見	下位群	15 71.43%		5 23.81%	1 4.76%		2 9.52%	23	21
	上位群	40 97.56%		1 2.44%		1 2.44%	3 7.32%	45	41
	全体	55 88.71%		6 9.68%	1 1.61%	1 1.61%	5 8.06%	68	62
全 12 項目	下位群	44 46.32%	26 27.37%	13 13.68%	10 10.53%	12 12.63%	18 18.95%	123	95
	上位群	93 67.39%	34 24.64%	5 3.62%	9 6.52%	9 6.52%	29 21.01%	179	138
	全体	137 58.80%	60 25.75%	18 7.73%	19 8.15%	21 9.01%	47 20.17%	302	233

全 12 項目の間接発話理解課題に対して、30 名の学習者が報告した理解のストラテジーは「論理的推論」「言語知識の慣習性」「パラ言語」「話者の意図」「隣接ペアの規則」「キーワード推論」という順で使用割合が低くなった。しかし、3 種類の間接発話行為を別々にみると、30 名の学習者が使用した理解ストラテジーの優先順位は必ずしも一致しているわけではない。また、各ストラテジーの使用割合もそれぞれ異なっている。以下では、下位・上位群の学習者が、間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見を理解する際に使用したストラテジーを具体的に分析する。

「使用の慣習」である間接断り行為の理解について、「論理的推論」は 72.62%と最も多く使われた。続いて、「話者の意図」と「隣接ペアの規則」などがみられた。これは、7 割以上の学習者が間接断りの文字通りの意味を理解してから、話者の断りの意図を解釈するというプロセスを優先することを示唆している。習熟度別に各理解ストラテジーの使用割合を比較すると、上位群の「論理的推論」は 80.00%で、下位群の 61.76%より高かった。また、「パラ言語」および「キーワード推論」も上位群のほうがやや高かった。一方、下位群の「話者の意図」は 32.35%

で、上位群の 10.00%より高かった。「隣接ペアの規則」の利用も下位群のほうが高かった。これは、上位群の学習者の日本語能力が下位群より優れており、文脈の流れおよび間接発話文をよく理解し、「論理的推論」で話者の断りの意図を解釈することを優先するからであろう。一方、下位群の学習者が、発話内容の理解に欠陥がある時、話者の断りの意図推察あるいは隣接ペアの規則の活用で、内容理解の欠陥を補うことが可能だと考えられる。

慣習的な間接意見の理解について、30名の学習者は「言語知識の慣習性」が 68.97%、「パラ言語」が 41.38%、「論理的推論」が 24.14%、「キーワード推論」が 10.34%の使用割合であった。次にみられたのは「隣接ペアの規則」および「話者の意図」であった。学習者は間接発話文における特定の言語形式、意味構造の慣習的な語用機能をもとに、慣習的な間接意見を解釈することが窺えた。また、学習者がこれらの「言語知識の慣習性」で話者の意図を解釈したと報告していると同時に、「パラ言語」のストラテジーも多く報告した。これは、「あまり」「ちょっと」「かな」「けど」などの表現が語用論的機能を果たしているとき、特定のイントネーション、リズムを伴うことが一般的であるからであろう。習熟度別にみると、「言語知識の慣習性」、「パラ言語」、「論理的推論」および「話者の意図」の使用頻度は上位群のほうが高かった。一方、下位群は「キーワード推論」および「隣接ペアの規則」を多用した。

非慣習的な間接意見の理解について、30名の学習者は、「論理的推論」の使用頻度が 88.71%と最も高く、他の理解ストラテジーの使用が少なかった。これは、2者対話の流れおよび間接発話文の文字通りの意味理解が話者の意図解釈において重要であることを示唆している。習熟度別にみると、上位群の「論理的推論」の使用頻度は 97.56%で、下位群の 71.43%より高かった。上位群は下位群よりも文脈の流れおよび間接発話文の意味をよく理解できたからであろう。これに対して、下位群は「キーワード推論」が 23.81%で、上位群よりも高かった。また、「パラ言語」の使用も下位群のほうがやや高かった。その他、上位群は「話者の意図」を1回、下位群は「隣接ペアの規則」を1回報告した。

5.3 下位・上位群の慣習・非慣習的な間接発話行為の理解における困難点

30名の学習者が誤答した127項目の口頭報告について、表3に示した基準で分析を行った。1つの口頭報告において、「聴解力の欠陥」の下位分類が複数認定される場合は、「聴解力の欠陥」を1回のみ集計した。また、下位群と上位群の誤答率が異なるため、特定の困難点が1誤答項目当たりの出現割合を計算した。その分析結果は表5に示した。

間接断り行為の理解について、下位群と上位群は共に「聴解力の欠陥」が最も多く認定された。下位群15名の間接断り行為の26誤答項目においては、すべて「聴解力の欠陥」が認定された。つまり、100.00%の割合であった。これに対して、上位群は、「聴解力の欠陥」が 70.00%、「油断」が 20.00%、「談話状況からの逸脱」が 10.00%認定された。5.2の理解ストラテジーの考察で、「隣接ペアの規則」「話者の意図」および「パラ言語」などの文脈情報が間接断り行為

の理解を促進することが明らかになったが、これらの学習者はうまく活用できていないようである。実は、「話者の意図」を正しく報告したが、聞き取れた表現に過度に依存しているため、聞き取れた表現を含む選択肢を直接に選んでしまう口頭報告が6回みられた。また、課題4において、「7時、から、コンピューターの授業がある」などのキーワードが聞こえたと報告した学習者が少なくないが、前文脈に照らし合わせて話者の断りの意図を推論できず、聞き取れたキーワードを含む選択肢を直接に選んでしまうケースも多かった。これらの学習者が発話内容の全体を的確に聞き取れない場合は、聞き取れた表現そのものに過度に依存してしまう傾向があるといえよう。

表5 下位・上位群の3種類の間接発話行為の理解困難点の認定結果

発話種類	グループ分け	聴解力の欠陥	言語知識の間違い	言語知識の慣習性の不理解	談話状況からの逸脱	背景知識/経験の干渉	油断	合計	誤答項目数
間接断り	下位群	26 100.00%						26	26
	上位群	7 70.00%			1 10.00%		2 20.00%	10	10
	全体	33 91.67%			1 2.78%		2 5.56%	36	36
慣習的な間接意見	下位群	9 45.00%	2 10.00%	8 40.00%	2 10.00%			21	20
	上位群	3 23.08%	6 46.15%	1 7.69%		3 23.08%		13	13
	全体	12 36.36%	8 24.24%	9 27.27%	2 6.06%	3 9.09%		34	33
非慣習的な間接意見	下位群	36 92.31%			2 5.13%		1 2.56%	39	39
	上位群	13 68.42%			5 26.32%		1 5.26%	19	19
	全体	49 84.48%			7 12.07%		2 3.45%	58	58
全12項目	下位群	71 83.53%	2 2.35%	8 9.41%	4 4.71%		1 1.18%	86	85
	上位群	23 54.76%	6 14.29%	1 2.38%	6 14.29%	3 7.14%	3 7.14%	42	42
	全体	94 74.02%	8 6.30%	9 7.09%	10 7.87%	3 2.36%	4 3.15%	128	127

慣習的な間接意見の理解について、30名の学習者は「聴解力の欠陥」「言語知識の慣習性の不理解」「言語知識の間違い」「背景知識/経験の干渉」「談話状況からの逸脱」という順で出現割合が低くなった。習熟度別にみると、下位群は、「聴解力の欠陥」が45.00%と最も多く認定された。次に多くみられたのは、「言語知識の慣習性の不理解」であり、40.00%であった。これに対して、上位群は、「聴解力の欠陥」が23.08%、「言語知識の慣習性の不理解」が7.69%（1回）認定され、下位群よりも低かった。一方、上位群は、「言語知識の間違い」が46.15%と下位群よりも多く観察された。これは課題項目7において、6名の上位群学習者が「5つ」を「6つ」と誤まって回答したからであろう。その他、上位群は「背景知識/経験の干渉」が23.08%、

下位群は「談話状況からの逸脱」が 10.00%認定された。

非慣習的な間接意見の理解について、「聴解力の欠陥」は 84.48%と最も多く認定された。その他、「談話状況からの逸脱」「油断」もみられた。習熟度別にみると、下位群は「聴解力の欠陥」が 92.31%で、上位群の 68.42%より多く認定された。一方、上位群は「談話状況からの逸脱」が 26.32%と、下位群より多く認定された。上位群の学習者は間接発話文そのものの意味内容を正しく報告したが、前文脈を踏まえて話者の意図を正しく解釈できなかった。張(2017: 42)においても同じ結果を報告した。さらに、2つのグループはそれぞれ「油断」を1回報告した。

6. 総合考察

本研究では、先行研究の問題点を改善し、クローズ・テストで分けた下位・上位群の学習者の慣習的である間接断りおよび間接意見、非慣習的な間接意見の理解正答率を検討した。また、2つのグループの学習者が3種類の間接発話行為を理解する際に使用したストラテジーと直面する困難点を定量的に検討した。以下は、考察を加えながら、学習者の間接発話理解の促進に提言を試みる。

まず、課題(1)では、30名の学習者の慣習的である間接断りおよび間接意見、非慣習的な間接意見の理解正答率は、上位群の学習者が下位群の学習者よりも高いことが分かった。また、慣習的である間接断りおよび間接意見は、非慣習的な間接意見よりも正答率が高かった。これは、Taguchi (2005) および張(2017)などの研究結果を支持している。つまり、日本語能力および慣習性が学習者の間接発話理解を促進することが明らかになった。そこで、学習者の間接発話行為の理解を促進するために、日本語能力を伸ばさせると同時に、特定の言語形式、意味構造、談話パターンなどの言語・使用の慣習を学習者に明示的に指導することも有効であろう。

次に、課題(2)の正答 233 項目の口頭報告についての分析で、中国人日本語学習者は言語知識だけではなく、「話者の意図」「パラ言語」「隣接ペアの規則」など多様なストラテジーを利用し、間接発話行為を理解していることが明らかになった。特に、発話内容の意味理解に支障がある際に、これらのストラテジーを活用し、話者の意図を正しく推論できたことも多く報告された。これは、間接発話行為の理解が多次元の知識の相互作用により完成されているといえよう (Taguchi 2002)。間接発話行為の理解という語用論的推論は、ボトムアップ処理とトップダウン処理それぞれに対応している低次レベルの解釈(言われていることを理解すること)と高次レベルの解釈(メッセージに対する話者の態度を理解すること)の相互作用を含んでおり、イントネーションや躊躇などの非言語的文脈情報は、高次レベルの解釈に関与し、発話の解釈において大きな役割を果たしている (Foster-Cohen 2000; Taguchi 2002)。課題(3)の誤答 127 項目の口頭報告の分析で、学習者が「聴解力の欠陥」以外に、「言語知識の間違い」「言語知識の慣習性の不理解」「談話状況からの逸脱」「背景知識/経験の干渉」などさまざまな困難点に直面していることが分かった。これらの理解ストラテジーおよび困難点は、下位・上位群の慣習

的である間接断りおよび間接意見、非慣習的な間接意見という3種類の間接発話行為の理解において、それぞれ異なる割合を示した。

間接断り行為の理解は、7割以上の学習者が「論理的推論」で話者の意図を解釈すること、また、誤答項目における困難点として「聴解力の欠陥」が頻繁に認定されることは、発話内容そのものの理解が重要であることを示唆している。一方、理解ストラテジーの分析で、「話者の意図」「隣接ペアの規則」などの文脈情報も多く報告されたことは、発話内容の意味理解が話者の意図解釈の唯一の手段ではないことを示唆している。特に、下位群の学習者が、より多くの「話者の意図」および「隣接ペアの規則」を活用した。これは、高次レベルの理解で低次レベルの理解欠陥を補うことができるといえよう。理由、言い訳で間接的に断りの意図を伝達する談話パターンは、日中両言語で共通しており（王・山本 2015）、学習者がこの使用の慣習を認識できれば、日本語における「話者の意図」が簡単に見出せるようになるのではないかと考えられる。それに、「隣接ペア」は、「依頼」といえば「承諾」あるいは「断り」、「提案」といえば「賛成」あるいは「不同意」がかえってくるような定着した発話のペアである。隣接ペアのなかで、第1の発話が強く第2の発話を制約している。この発話の規則にしたがわない返答（第2の発話）が有標行為になり、話し手の「動機遡及」を引き起こしやすいと考えられる（Hutchby & Drew 1995）。しかし、下位群の誤答26項目の間接断り行為の理解には、100%で「聴解力の欠陥」が認定され、「話者の意図」「パラ言語」「隣接ペアの規則」などもうまく活用できていないことが推察された。また、上位群の間接断り行為における誤答10項目のうち、「聴解力の欠陥」も70%認定された。これらの学習者は、ボトムアップ処理に過度に依存してしまうことが示唆されるのではないかとと思われる。そこで、学習者の間接断り行為の理解を促進するために、日本語能力を向上させると同時に、断りを表す慣習的な談話パターンを認識させることも有効であろう。

慣習的な間接意見の理解において、上位群の学習者は下位群と比べ、より多く「言語知識の慣習性」を利用し、また、「言語知識の慣習性の不理解」の報告も1回しか観察されなかった。これは、上位群が下位群よりも言語知識の慣習性の習得がよいといえよう。「ちょっと」「あまり」「どうも」などの副詞、「かな」「かも知れない」「という気が」などの躊躇を表す文末表現は、話者のネガティブな意思表明と関係しやすいので、これらの言語知識の慣習性は学習者が習得し、また、うまく運用できれば、話者の意図解釈が容易になるのではないかと考えられる。なお、この言語知識の慣習性は自動的に習得できず、教育現場で教えるべきものであり、日本語学習の初級レベルから慣習性の特徴を意識的に教授する必要がある（Taguchi 2008）。その他、上位群と比べ、下位群はより「キーワード推論」で話者の意図を解釈し、また、より多くの「聴解力の欠陥」が認定されることは、下位群の聴解力の不足を示した。これは Taguchi (2002: 167) の指摘を支持した。聴解力が欠如する学習者は、直接にキーワードを選択したり、キーワードと最も関連しやすいと思われる指示対象を選択したりする傾向があると考えられる。一方、上

位群は「背景知識/経験の干渉」が下位群よりも高かった。「反対の意見を直接言わないのは、反対ではなく迷っている。」という回答は、学習者の背景知識/経験により引き起こされ、上位群でも間違いやすいようである。張（2017: 41）も上級日本語学習者の背景知識の問題点を指摘している。

非慣習的な間接意見の理解について、学習者が報告した理解ストラテジーおよび困難点から分かるように、理解課題における文脈の流れおよび間接発話文の意味内容の理解が最も重要であろう。これは非慣習的な間接発話行為の理解プロセスに関係しているといえよう。非慣習的な間接発話行為の理解は、間接発話の文字通りの意味を理解してから、文脈に照らし合わせて、話者の意図を解釈するというプロセスである（清水 2009）。学習者が間接発話文の意味論的な意味と直前の対話の流れを理解できれば、母語の基本的な推論能力を外国語の理解に適用することができるので、字義通りの意味と話者の意図との間の関連性を見出すことが容易であると思われる。そこで、非慣習的な間接発話行為の理解は、学習者の日本語能力を十分に培うことが大前提だと考えられる（李・玉岡 2019）。

7. 今後の課題

本研究の結果においては、習熟度に関わらず、学習者の間接発話理解の最も大きな困難点は「聴解力の欠陥」であることが分かった。しかし、その根本的な原因は学習者の言語知識がもとより不足していることにより聞き取れないのか、あるいは、聴覚提示なので、個人の語彙へのアクセス速度に影響され、瞬時に反応できないのか、つまり、言語知識そのものの問題なのか、処理効率性の問題なのか、さらに検討する必要がある。また、本研究は先行研究で使われる慣習・非慣習的な間接発話の調査項目を参考にし、理解課題を作成したが、今後は実験的な方法で間接意見の慣習性を同定し、調査項目を作成したいと思う。

注

- 1) 「思考発話法」は、学習者が特定のタスク（理解や読解など）を実行するときに学習者の心に何が起こるのかを調べる手法である（Lee 2010）。
- 2) 「刺激再生法」は、被験者の行動に関するデータを観察・収集した後で、被験者になぜそのような行動をとったのかを聞く方法である。
- 3) 調査協力者は中国語で報告したが、紙幅の関係上、その日本語訳のみを提示した。
- 4) この表記について、JL は日本語学習者、25 は学習者の ID、12 は間接発話理解課題の番号を指す。
- 5) 「隣接ペア」は、隣接した発話のペアであり、2 つ目の発話が機能的に最初の発話に依存する一対の発話のことである。たとえば、「依頼」に対する「承諾」あるいは「断り」、「提案」に対する「賛成」あるいは「不同意」などがある。

6) 間接断りを「使用の慣習」、慣習的な間接意見を「言語の慣習」として捉えた。

引用文献

- 王源・山本裕子（2015）「親しい友人に対する断り行動の日中対照研究」『中部大学人文学部研究論集』34, 19-35.
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子（2007）「第二言語としての日本語の単語認知に及ぼす文脈の影響—二言語混在文の正誤判断における抑制効果の観察を通して—」『小出記念日本語教育研究会論文集』15, 7-21.
- 清水崇文（2009）『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- スperlベル, D. & ウイルソン, D. (1995) 『関連性理論—伝達と認知』内田聖二, 中達俊明, 宋南先, 田中圭子（訳）, 研究社
- 張麗（2017）「慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響—JFL 中国人上級日本語学習者を対象として—」『日本語教育』167, 31-45.
- 仲真紀子・無藤隆（1983）「間接的要求の理解における文脈の効果」『教育心理学研究』31(3), 195-202.
- 朴仙花（2008）「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について—「けど」「から」を中心に—」『言葉と文化』9, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 253-270.
- 李璐・玉岡賀津雄（2019）「中国人日本語学習者の間接発話行為の理解—慣習性と習熟度の影響—」『中国語話者のための日本語教育研究』10, 12-28.
- Bouton, L. (1988). A cross-cultural study of ability to interpret implicatures in English. *Word Englishes*, 2, 183-196.
- Cook, M., & Liddicoat, A. J. (2002). The development of comprehension in interlanguage pragmatics: The case of request strategies in English. *Australian Review of Applied Linguistics*, 25, 19-39.
- Foster-Cohen, S. H. (2000). Review article: Sperber, D. and Wilson, D. 1995: Relevance: Communication and cognition. *Second Language Research*, 16(1), 77-92.
- Gibbs, R. W. (1981). Your wish is my command: convention and context in interpreting indirect requests. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 20, 431-444.
- Gibbs, R. W. (1986). What makes some indirect speech acts conventional? *Journal of Memory and Language*, 25(2), 181-196.
- Holtgraves, T. (2007). Second language learners and speech act comprehension. *Language Learning*, 57(4), 595-610.
- Hutchby, I., & Drew, P. (1995). Conversation analysis. J. Verschueren, J-O. Östman, J. Blommaert & C. Bulcaen (Eds.), *Handbook of Pragmatics* (pp. 182-189), Philadelphia: John Benjamins.

- Lee, C. (2010). An exploratory study of the interlanguage pragmatic comprehension of young learners of English. *Pragmatics*, 20(3), 343-373.
- Morgan, J. L. (1978). Two types of convention in indirect speech acts. In P. Cole (Ed.), *Syntax and Semantics 9: Pragmatics* (pp. 261-280), New York: Academic Press.
- Taguchi, N. (2002). An application of relevance theory to the analysis of L2 interpretation processes: the comprehension of indirect replies. *International Review of Applied Linguistics*, 40, 151-176.
- Taguchi, N. (2005). Comprehending implied meaning in English as a foreign Language. *The Modern Language Journal*, 89, 543-562.
- Taguchi, N. (2008). Pragmatic comprehension in Japanese as a foreign language. *The Modern Language Journal*, 92, 558-576.
- Zhang, L. (2018). Comprehension of Japanese indirect speech acts by Chinese learners: Focusing on the use of context information. *中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル*, 22, 11-19.

Web サイト

日本語読解学習支援システム「リーディングチュウ太」<http://language.tiu.ac.jp/> (2019 年 7 月 21 日アクセス確認)